

脩竹餘韻









修竹餘韻

故西川文藏君追懷錄



本書を西川文藏君の靈前に獻ぐ





故西川文藏君の肖像

大正八年六月撮影











清入骨

木堂題











德

愈

馨

湖  
南  
題











王羲之

子

安











香語

碧層軒

法身堅固本來香  
郁々子薰徹十方  
誠滅却心頭火者  
鑊湯爐炭自清涼







脩竹餘韻序



友人鈴木商店支配人森君衆郎來謂曰。歲月匆匆。同僚西川君文藏一周忌辰。已在三旬後。因編君日乘。附以諸家追悼文。名曰脩竹餘韻。脩竹君別號也。欲排印以供祭壇。且願諸知人。請子序之。予固熟交。烏容辭。君近江人。幼穎敏。長入東京高等商業學校。後參與鈴木商事者二十七年。恪勤嚴密。百事悉適。機宜。遂致今日之盛運。而天不假其壽。可不惜哉。允。

人壽則功益大。君僅四十有七。而功績甚偉。若使君  
尚得數年壽。其功績果為何如。宜諸家哀悼。追惜而  
不措也。君精書畫。鑑識眼光透徹。舉其瑕瑾。猶指摘  
事務錯誤。予恒服其詳覈。而其人今也則亡矣。森君  
厚於友情。能傳其功績。脩竹餘韻。戛戛不盡。君可以  
瞑哉。

大正十年四月

香國

土居通豫撰并書









## 序

故西川文藏君の一周忌に際し、生前親交ある諸氏が追懷録を作り、同君を追慕しやうと云ふ御計畫は、誠に結構な思附で、私は大に賛成する。然るに私にも何か書けと云ふことで、乃ち此序文を書くことにした。

君は私より四歳の年長であつた、君が店へ來たのは君の二十一歳私の十七歳の時であつた、當時家父は達者であるし、私は君と恰も友達の様にして店務に關係して居つた、其れ以來二十有七年間、君は店の爲めに身心を傾倒したのだから、如何に謹直一徹の君なればとて、書くべきことは相當にある、然るに今諸氏の寄稿を敬讀するに、私の言はんとする所陳べんとする所は幾んど盡して居る、旁私は序文を書いて其責を塞ぐことにしたのである。

寔に二十有七年間、終始一貫店の爲めに君が忠誠を抽んで、奮闘して呉れたことは、私の衷心より感謝するところ、従て諸氏の此企は所謂君の

功勞に報謝する一端であつて、私の喜悅は譬へ様もないのである。冒頭にも陳べた如く、本書は君の一周忌を期して配本する筈になつて居つた様である、此事に就ては編者も例言に斷つて居るが、陸氏羯南は東京電報を創刊し、或は又谷隈山將軍後援の下に新紙日本を刊行した文士であつた、而して其友文學士臨淵福富孝季氏の爲に臨淵言行録を編纂するに、殆ど一歳月を閲して業を終へて居る、一廉の文士が従事しても斯様である、況して日々店頭事務を執つて居る諸氏に依りて企てられたのであるから、君の一周忌辰に間に合はなかつたことは、君の靈も不満はあるまいし、寄稿した諸賢も不服はあるまいと信ずる、要するに私は、我が商店の柱石たり我々の龜鑑たりし君の言行を、本書に依り永遠に傳へ得ることを茲に感謝する。

大正十年六月

鈴木岩治郎





# 序



凡事可傳而不必傳者有之矣可傳而不可不傳者有之矣嗚呼如西川脩竹君事蹟豈非可傳而不可不傳者乎此余之所以編纂是書也初余以從事於斯也徧求于君之舊而知而問其外事畏友瘞肩藤樵風君寄書于余曰是至難事也君能自信而敢

行乎余頗憂之然君已後不經一  
年寄稿輻湊能成是書雖固由  
當事諸子之勤勉亦可以見君清  
德高風感人之深矣傳曰德必有  
隣君之謂也君姓五川氏諱文藏  
號脩竹近江今津人

大正辛酉七月

柳軒散人素齋郎撰并書









## 例言

一 往年故人の手記せる日乗の存するもの都て六冊、記するに蠅頭の細字を以てす、而して日々記事あらざるはなし、就中拔萃排印せし原稿は頗る大冊のものたりしも、査閲幾回整理の餘、其公表を憚るもの平簡なるもの等、皆之を除却せり、是れ恰も上機の錦繡を裁斷するの憾ありしも蓋し已むを得ざるなり。

一 故人最終の撮影を得んとして、周く索めしも得ず、漸く故人易簧の前年、即ち大正八年初夏、丹波の人西山作右衛門氏及同地方小學校長等數十名來神の際、故人か此一行と共に鈴木商店俱樂部の庭園に於て撮影せられしものを得たり、今之を百餘倍に擴大せしもの即ち卷頭の寫照なり、蓋し再三の加工或は天真を損せしものなきにあらずと雖も、神韻髣髴、親しく歿前の故人に見ゆるの感あるを覺ゆるなり。

一主婦の語多くは主人の婦を意味し、寡婦たる女主人の稱呼と爲すは稍妥當ならざるに似たり、然るに故人の日記中、往々未亡人たる鈴木よね子、刀自を稱して主婦の字を使用せり、蘇老泉高祖論中、呂后を目して主母と稱し、且母夫人の熟語あるを思ひ、今は日記中に於ける主婦の字を改訂して主母夫人と爲せり、俗にお家の稱ありと雖も、是亦近畿地方の方言に屬し、一般に通せざるか故なり。

一青木木米は近世陶工の巨匠なり、其坯を製するものに久米あり、其子に久太あり、久太の陶埴を以て木米の施工せしもの最も傑作を出せりと云ふ、諸賢の寄せられたる追懷文は實に久太の陶埴に類するあり、之に對し、白羊石橋爲之助君の加筆せられたるは恰も木米の久太の陶埴に加工したるか如し、一面よりすれば其製作の天真を損したる觀なきにあらすと雖も、爲めに陸離たる光彩を發せしものありて本書の一部に絢爛の美を添ふるものありとせば、施工豈亦天真の妙

趣一等を發揮せしめしものなしとせんや、投稿の諸君子幸に諒焉。

一本書題辭の撰擇、香國先生の序文及是等の揮毫並表紙の意匠は、余専ら斡旋し且考案せり、而して酸漿は傳來の家紋、題簽其他の文字は故人の知友古河倍造君の揮毫せられたるものなり。

一本書は故人の一周忌辰に之を完成せんことを欲せしも、終に其時機を逸せしもの、全く編者の努力足らざるの致す所なり、茲に深く之を謝す。

一本書は余一時其編輯の衝に當りしも、繁劇到底之を整理するを得す終に石橋白羊君に其編纂を依囑せり、唯編者として名を掲けしは一に頭初よりの關係に基因すと雖も、潛越蓋し慚汗背に浹きを覺ゆるなり。

一本書の編輯に就てば、石橋白羊君を始めとし、同人椋野武吉、大野義男、土居英成、岡清一等諸君の努力鮮少ならず、此に特筆して深く其勞を

謝す。

大正十年七月下浣

森 衆 郎 謹 識

# 脩竹餘韻目次

## 故人の肖像

題字

犬養毅

同

文學博士

内藤虎次郎

同

文學博士

前田慧雲

香語

祥福寺住職

五葉愚溪

序文

香國

土居通豫

同

鈴木岩治郎

同

森衆郎

例言

編者

西川文藏君略歴……………一

夫人の手に成れる病床日誌附、病中の食餌……………九

故人を追慕するの記……………西川芳太郎……………四九

故人日記の中より……………八一

故人罹病中手簡の一部……………一六三

弔辭

(其一) 大正九年五月二十三日葬儀に際し……………一七三

(其二) 大正九年六月十三日五七日法會に際し……………一九三

(其三) 各地追悼式に於て……………一九八

新聞雜誌記事……………二〇七

故人言行の片鱗……………二二一

一 偉人に逸話無し……………金子直吉……………二二三



二	噫良支配人……………	柳田富士松……………	二二六
三	主治醫として……………	松永榮吉……………	二三〇
四	誠實の人……………	西廣吉……………	二三四
五	思ひ出づるまゝ……………	吉田熊太郎……………	二三五
六	追懷……………	淺田泉次郎……………	二四二
七	西川文藏氏を憶ふ……………	北村和三郎……………	二四九
八	家庭の人、金子氏の女房役……………	楠瀬正一……………	二五六
九	英雄の生涯……………	松代和四郎……………	二六一
一〇	噫西川文藏君……………	落合牛太郎……………	二六五
一一	今津時代の西川氏……………	玉木新造……………	二六七
一二	二十年振上京された時……………	建部清四郎……………	二六九
一三	故人の面影……………	氏家幾太郎……………	二七四

- 一四 故人を偲ふ……………西岡貞太郎……………二七六
- 一五 故人の懇到なりし一例……………日向利兵衛……………二七八
- 一六 四十一二年の事柄……………松島久之助……………二八〇
- 一七 鯉節の様な人……………妹尾清助……………二八五
- 一八 西川君に就て……………武岡豊太……………二九〇
- 一九 追悼一夕話……………西村正雄……………二九一
- 二〇 西川文藏君を惜む……………西和田久學……………三〇六
- 二一 鈴木商店の柱石……………依岡省輔……………三〇八
- 二二 温情至誠の人……………田宮嘉右衛門……………三〇九
- 二三 追懐の辭……………日野誠義……………三一〇
- 二四 人格と手腕……………谷治之助……………三二六
- 二五 毎朝三十分の勤行……………井原五兵衛……………三二八

二六	二十年前の西川君	服部馬太郎	三一九
二七	斯の一事	米田龍平	三二三
二八	西川文藏氏と其故郷	今井完造	三二五
二九	西川文藏君と兼助の短刀	森田葆光	三二七
三〇	君と我	岡 謹一郎	三二八
三一	岐阜の名物	加藤廉之助	三三一
三二	店員信服敬慕の府	土屋新兵衛	三三四
三三	憶故人	人見一太郎	三三四
三四	國家の一大損失	田口治三郎	三三六
三五	眞の紳士	椋野武吉	三三八
三六	謹嚴、謙遜、報恩	水島 鍊也	三四〇
三七	三十年一日	石橋爲之助	三四三

- 三八 人格の人……………鈴木伊十……………三四六
- 三九 些の俗氣無し……………高倍權太郎……………三六三
- 四〇 鈴木スピリツトの權化……………幸松文太……………三六四
- 四一 一躍スキ焼通となる……………龜井英之助……………三六五
- 四二 君と梅厓と家父……………芳川筍之助……………三六七
- 四三 逸事の一……………齋藤熊三郎……………三七〇
- 四四 故人と石鴻元……………重永壯輔……………三七四
- 四五 故人の動中靜、靜中動……………柏田忠藏……………三八〇
- 四六 溫情公平なる紳士……………小宮小四郎……………三八三
- 四七 是れ有る哉……………吉田實治郎……………三八五
- 四八 逸事三片……………大松幸吉……………三八六
- 四九 故人の經綸……………金子曜高……………三八九

- 五〇 遠くから見たる西川支配人……………上村政吉……………三九一
- 五一 故人より受けたる教訓……………高畑誠一……………三九三
- 五二 故人の性格……………永井幸太郎……………三九五
- 五三 西瓜のやうな……………澤村亮一……………三九八
- 五四 家庭に於ける故人……………後藤半七郎……………四〇二
- 五五 手向草……………大野義男……………四〇五
- 五六 故人の眞情……………宇野一夫……………四〇九
- 五七 故人の言行……………土居英成……………四一二
- 五八 人を見るに細心……………土橋英太郎……………四一四
- 五九 追慕の念止み難くして……………高橋行次……………四一五
- 六〇 私の見た西川さん……………谷垣勝藏……………四二〇
- 六一 哀しき思出……………中村寅次郎……………四二九

- 六二 謹直の化身……………永瀬彰三……………四三四
- 六三 西川支配人を偲ふ……………岡清一……………四三八
- 六四 かたみ……………北尾直樹……………四五七
- 六五 感涙餘瀝……………須原政一……………四七一
- 六六 御葬送に陪して……………山根仙之助……………四八六
- 六七 御慈愛深き西川さん……………加藤富男……………四九一
- 六八 スの訓戒……………小野禎一郎……………四九三
- 六九 半切紙のをしへ……………宮崎好道……………四九四
- 七〇 追憶……………多賀二夫……………四九七
- 七一 西川さんに對する自分の印象……………西岡勢七……………五〇〇
- 七二 超發院を憶ふ……………西山作右衛門……………五〇五
- 七三 追懷餘噫……………森衆郎……………五一〇

追懷書簡

五二七

- |    |       |    |       |    |        |
|----|-------|----|-------|----|--------|
| 一  | 石鴻元   | 二  | 勝屋利秋  | 三  | 大久保彌十郎 |
| 四  | 中川二郎  | 五  | 戸坂隆吉  | 六  | 篠原祐喜   |
| 七  | 北村徳太郎 | 八  | 西川玉之助 | 九  | 足助太郎   |
| 一〇 | 安宅彌吉  | 一一 | 大音新吉  | 一二 | 前川清二   |
| 一三 | 前田慧雲  | 一四 | 千葉泰治  | 一五 | 横山又吉   |
| 一六 | 毛利三郎  |    |       |    |        |

寫真

- |       |      |      |              |
|-------|------|------|--------------|
| 故人の筆蹟 | (其一) | 病中手簡 | (鈴木商店濟美會報所載) |
| 故人の筆蹟 | (其二) | 病中手簡 | (鈴木商店濟美會報所載) |
| 故人の筆蹟 | (其三) | 病中手簡 | (絶筆)         |

學生時代

(明治二十三年一月滋賀縣商業學校卒業前——十七歲)  
(明治二十四年十一月東京高等商業學校第二學年——十八歲)

鈴木商店入店前後

(明治二十七年一月友人宮田熊太郎氏と神戸にて撮影——二十一歲)  
(明治二十七年三月入店當時——二十二歲)

結婚當時

(明治三十一年十一月——二十五歲)  
(明治三十二年一月——二十六歲)

支配人就任前後

(就任前 明治四十一年——三十四歲)  
(就任後 明治四十一年十一月——三十五歲)

遺族

(令息令嬢 大正七年九月撮影)  
(未亡人 大正九年十一月撮影)

庭園と邸宅

庭園、本館、茶室

故人の筆蹟

(其四)

故人遺愛の硯

(其二)

山水彫刻青端溪

故人遺愛の硯

(其三)

宋代紫端溪

故人の筆蹟

(其五)

奇

縁

内藤博士の書翰



楊柳觀音の圖竝書翰 橋本關雪氏

友人の弔句 金子直吉氏、椋野武吉氏

密葬當日(其二) 靈柩と近親者

密葬當日(其二) 靈柩 門前を出てんとす

密葬當日(其三) 靈柩 會下山火葬場に向ふ

本葬當日(其二) 喪主位牌を護持し式場善福寺に入る

本葬當日(其二) 善福寺式場の内部

五七忌法會(其二) 祥福寺靈前 鈴木岩治郎氏の弔辭朗讀

五七忌法會(其二) 祥福寺に於ける施主 近親者

故人墓標



故人の筆蹟 (其二)

病中手簡 (鈴木商店贈美會館)



一、小兒病一、咳嗽、痰多、氣喘、胸膈不舒、不思飲食、夜臥不安、手足心熱、口乾、口渴、大便燥結、小便赤澀、此為肺熱之證、宜用清肺化痰、止咳平喘之劑、如麻杏石甘湯、或桑菊飲、或清肺散、均可、

二、肺癆、咳嗽、痰多、氣喘、胸膈不舒、不思飲食、夜臥不安、手足心熱、口乾、口渴、大便燥結、小便赤澀、此為肺熱之證、宜用清肺化痰、止咳平喘之劑、如麻杏石甘湯、或桑菊飲、或清肺散、均可、

三、肺癆、咳嗽、痰多、氣喘、胸膈不舒、不思飲食、夜臥不安、手足心熱、口乾、口渴、大便燥結、小便赤澀、此為肺熱之證、宜用清肺化痰、止咳平喘之劑、如麻杏石甘湯、或桑菊飲、或清肺散、均可、

四、肺癆、咳嗽、痰多、氣喘、胸膈不舒、不思飲食、夜臥不安、手足心熱、口乾、口渴、大便燥結、小便赤澀、此為肺熱之證、宜用清肺化痰、止咳平喘之劑、如麻杏石甘湯、或桑菊飲、或清肺散、均可、

五、肺癆、咳嗽、痰多、氣喘、胸膈不舒、不思飲食、夜臥不安、手足心熱、口乾、口渴、大便燥結、小便赤澀、此為肺熱之證、宜用清肺化痰、止咳平喘之劑、如麻杏石甘湯、或桑菊飲、或清肺散、均可、

六、肺癆、咳嗽、痰多、氣喘、胸膈不舒、不思飲食、夜臥不安、手足心熱、口乾、口渴、大便燥結、小便赤澀、此為肺熱之證、宜用清肺化痰、止咳平喘之劑、如麻杏石甘湯、或桑菊飲、或清肺散、均可、

七、肺癆、咳嗽、痰多、氣喘、胸膈不舒、不思飲食、夜臥不安、手足心熱、口乾、口渴、大便燥結、小便赤澀、此為肺熱之證、宜用清肺化痰、止咳平喘之劑、如麻杏石甘湯、或桑菊飲、或清肺散、均可、

八、肺癆、咳嗽、痰多、氣喘、胸膈不舒、不思飲食、夜臥不安、手足心熱、口乾、口渴、大便燥結、小便赤澀、此為肺熱之證、宜用清肺化痰、止咳平喘之劑、如麻杏石甘湯、或桑菊飲、或清肺散、均可、

九、肺癆、咳嗽、痰多、氣喘、胸膈不舒、不思飲食、夜臥不安、手足心熱、口乾、口渴、大便燥結、小便赤澀、此為肺熱之證、宜用清肺化痰、止咳平喘之劑、如麻杏石甘湯、或桑菊飲、或清肺散、均可、

十、肺癆、咳嗽、痰多、氣喘、胸膈不舒、不思飲食、夜臥不安、手足心熱、口乾、口渴、大便燥結、小便赤澀、此為肺熱之證、宜用清肺化痰、止咳平喘之劑、如麻杏石甘湯、或桑菊飲、或清肺散、均可、



# 故人の筆蹟

(其二)

## 病中手簡

(鈴木商へ、初四行、  
權美以下、觀所、  
筆、)









故人の筆蹟  
病中手簡  
（其三）

（通）筆







代 時 生 學

明治二十四年十一月  
東京高等商業學校  
第二學年（十八歲）

明治二十三年二月  
滋賀縣商業學校  
卒業前（十七歲）









鈴木商店 前店後

明治二十七年三月  
入店當時

(二十二歲)

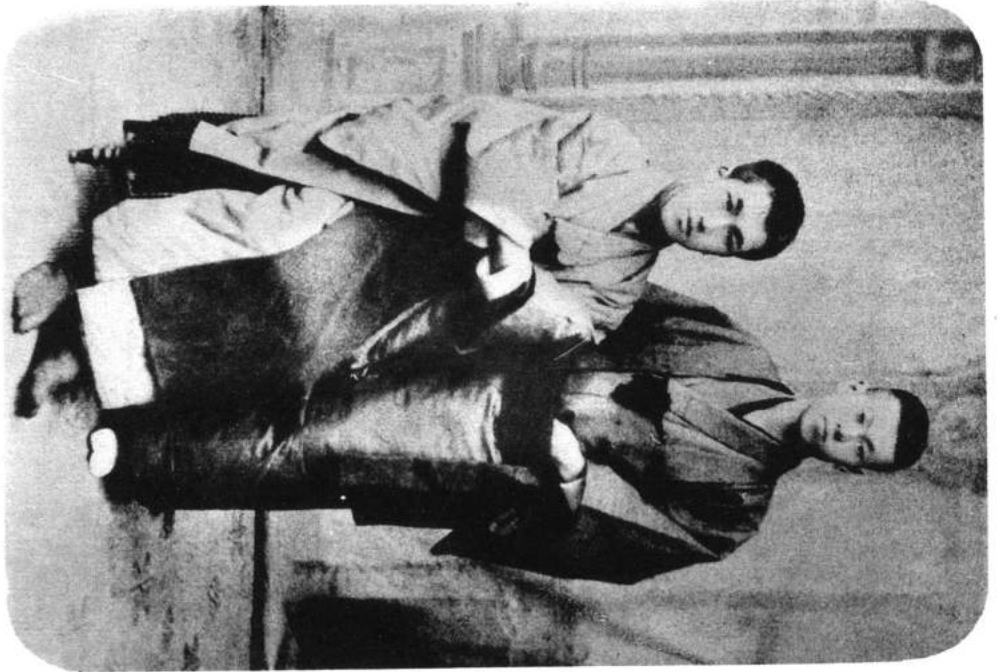
明治二十七年二月

友人吉田熊太郎氏と

神戸にて撮影

(二十二歲)







時 當 婚 結

明治三十二年二月

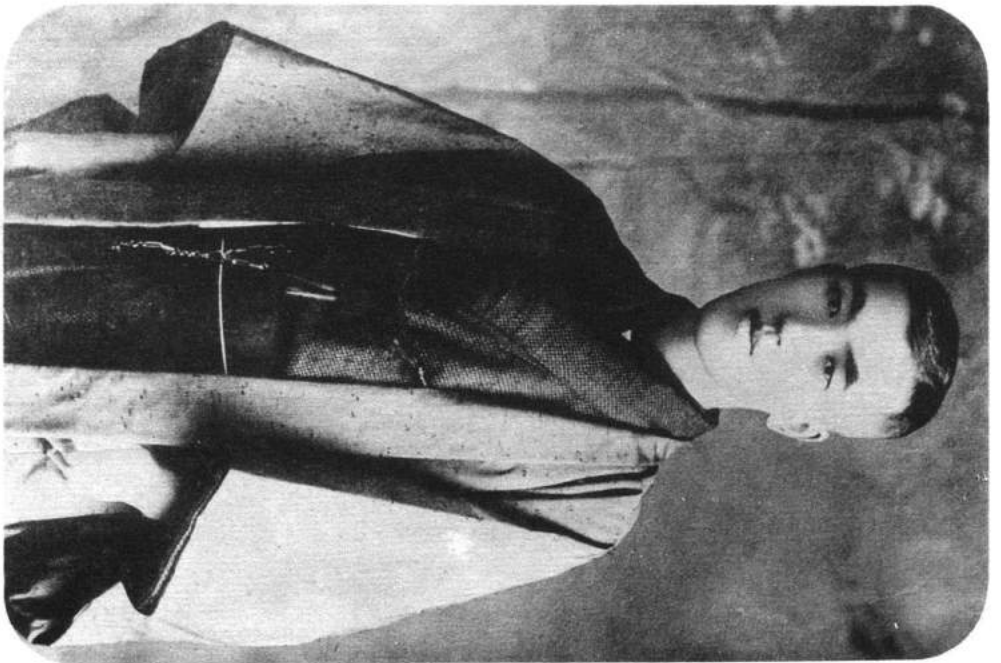
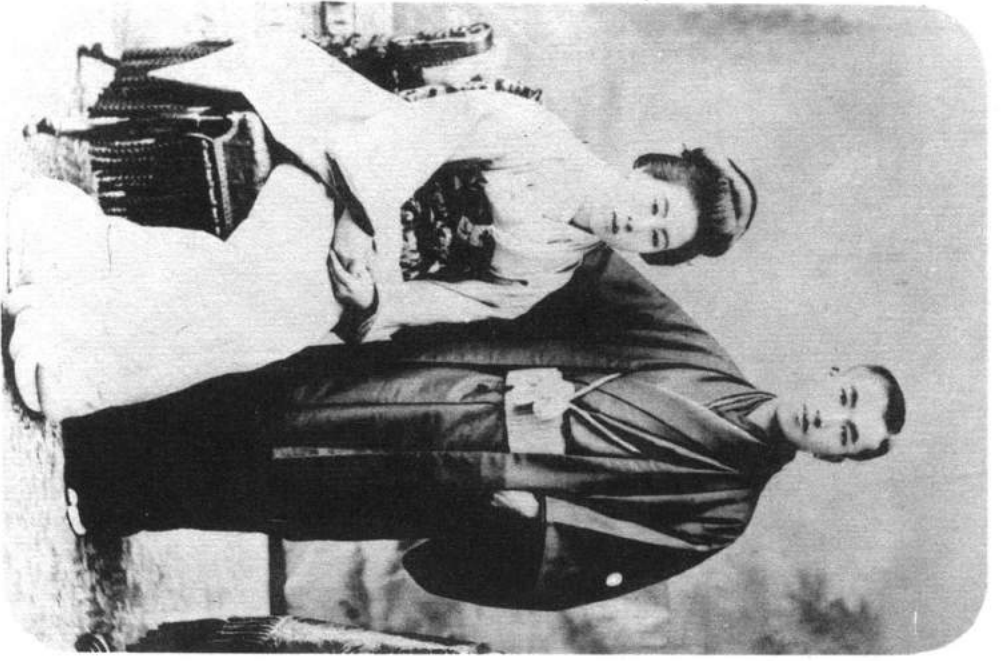
(二十六歲)

明治三十一年十一月

(二十五歲)









後 前 任 就 人 配 支

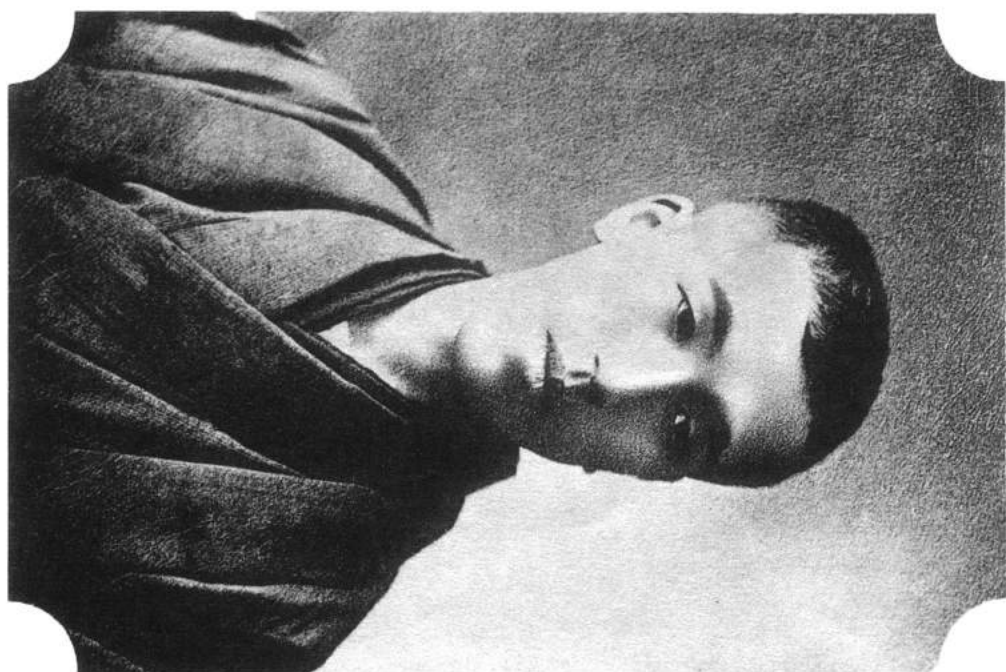
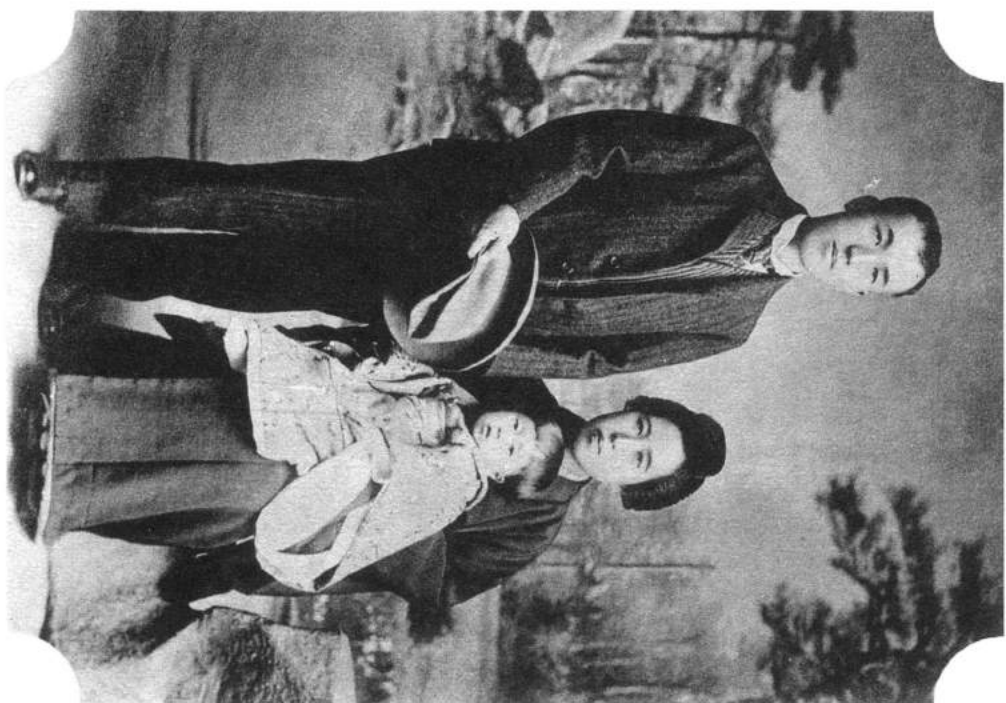
就 任 後

明治四十一年十一月  
(三十五歲)

就 任 前

明治四十年  
(三十四歲)







族

遺

未 亡 人

(大正九年十一月攝影)

令 息 令 孀

(大正七年九月攝影)









宅邸の園庭

庭

園

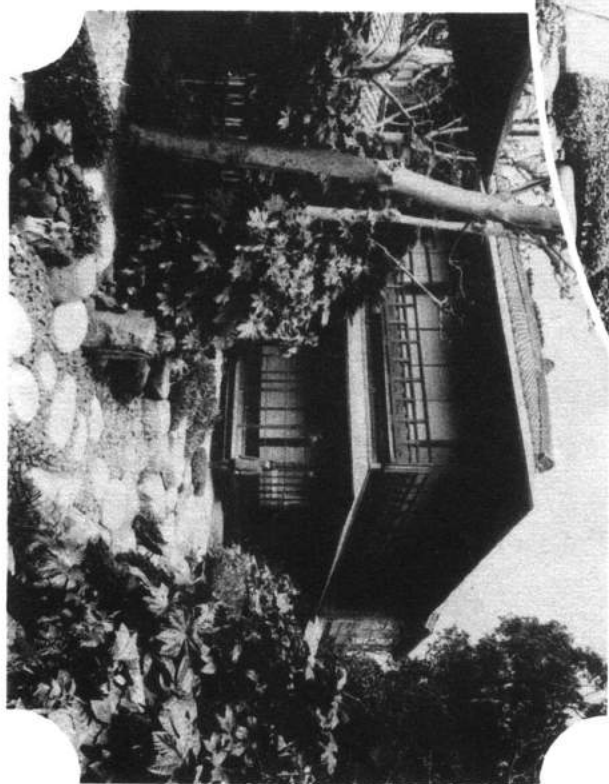
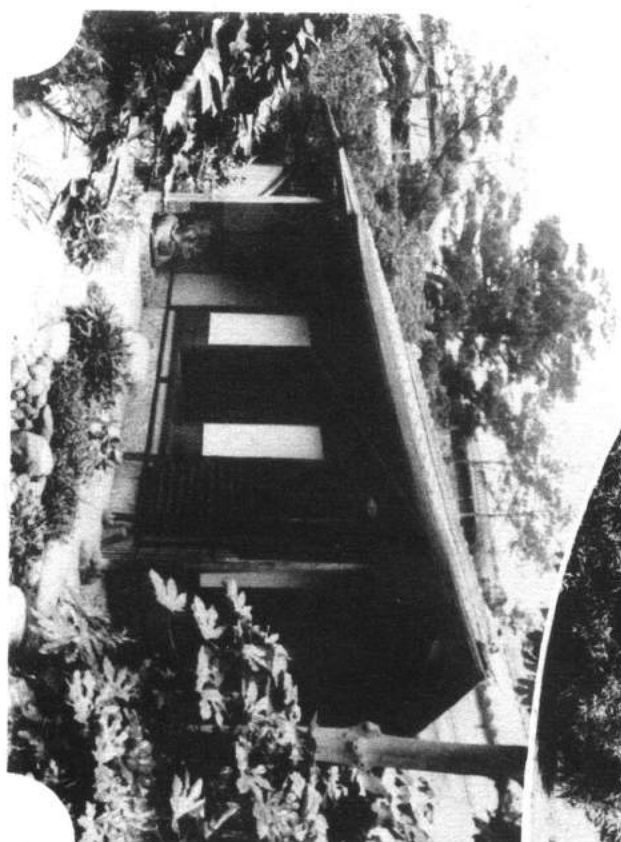
茶

室

本

館







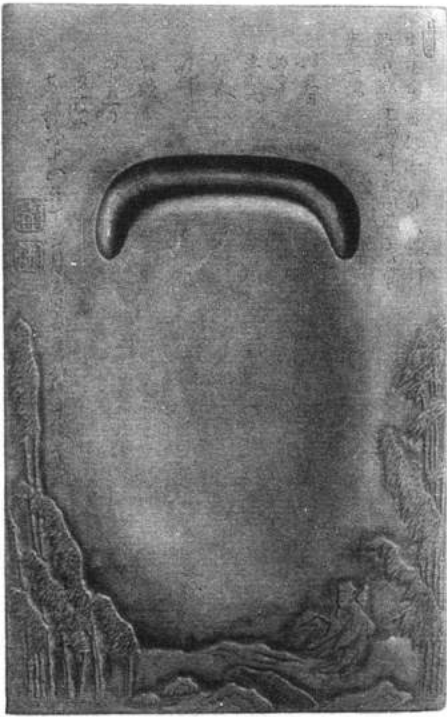
一 故人の筆蹟 (其四)

二 故人遺愛の硯 (其二)

山水彫刻青端溪







留邨高同儔芳川蜀之助名嚴父也高受業廣源林外往年嘗悅  
 浪其以信為業其信餘港亦嘗受業不逸品矣惜我志眼竟失明也歎  
 蓋史明前所書風韻餘坊筆力逆動可謂得明法人之秘研者矣  
 森言請全題畫乃書以還之  
 大正四年一月  
 西川文義館

芳川留邨高秋日山寺七絕紙本堅幅



故人遺愛の硯

(其二)

宋代紫端溪







此後  
至後漢文人也  
至後漢文人也  
至後漢文人也

至後漢文人也

至後漢文人也

至後漢文人也

至後漢文人也

至後漢文人也

至後漢文人也

至後漢文人也

至後漢文人也

至後漢文人也

至後漢文人也

至後漢文人也

至後漢文人也

至後漢文人也

至後漢文人也





奇

縁

内藤博士の書翰







楊柳觀音の圖竝書翰

橋本關雪氏









友 人 の 弔 句

金 子 直 吉 氏

棕 野 武 吉 氏



二月 梧桐の夜  
の巻  
おもしろい  
白紙

衣交へ候す。白紙  
青の巻

惚りも形への軸  
十時





密

葬

當

日

靈柩之近親者

(其一)









密

葬

當

日

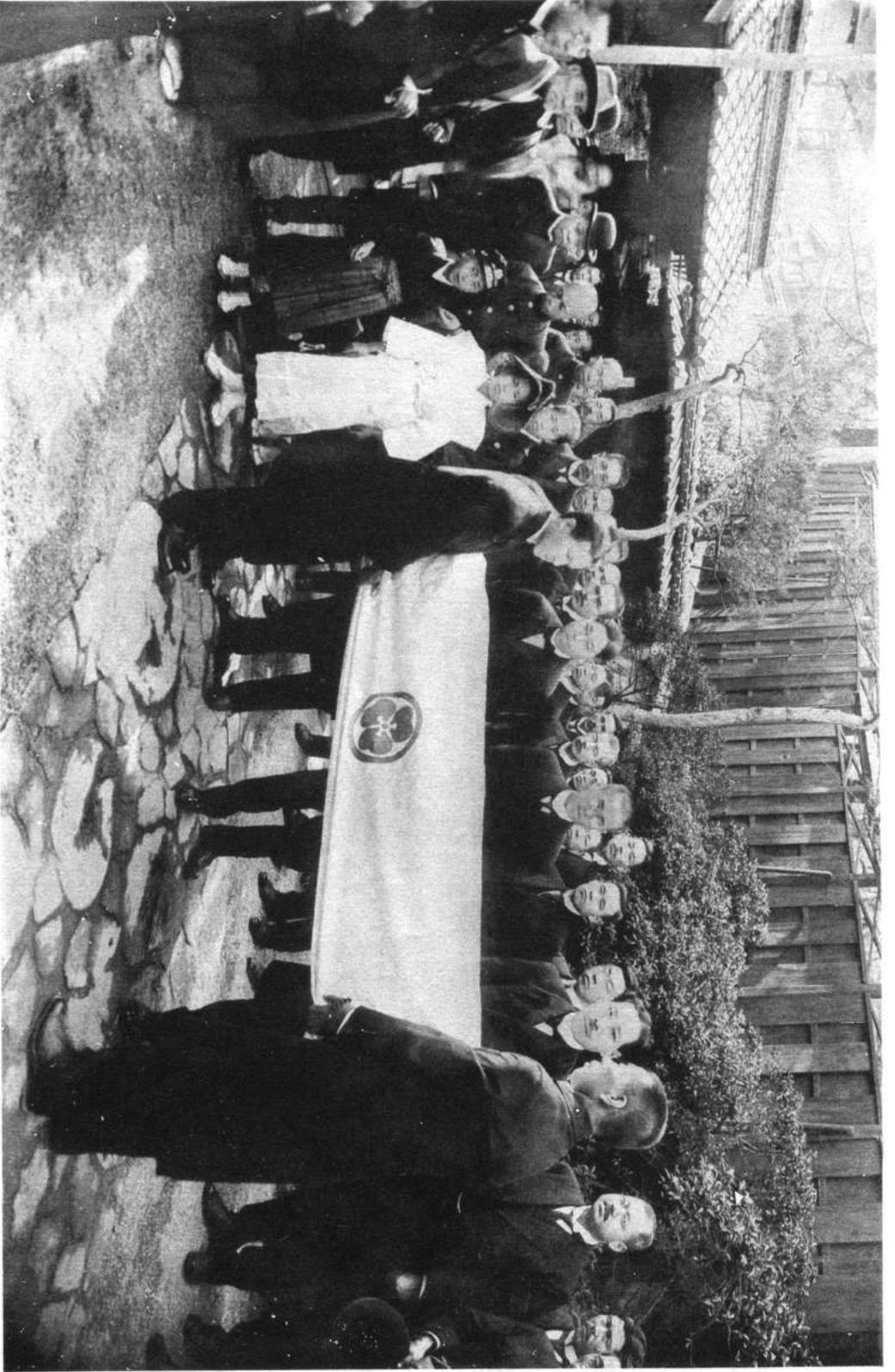
(其二)

靈

柩

門前を出でんぞす







密

葬

當

日

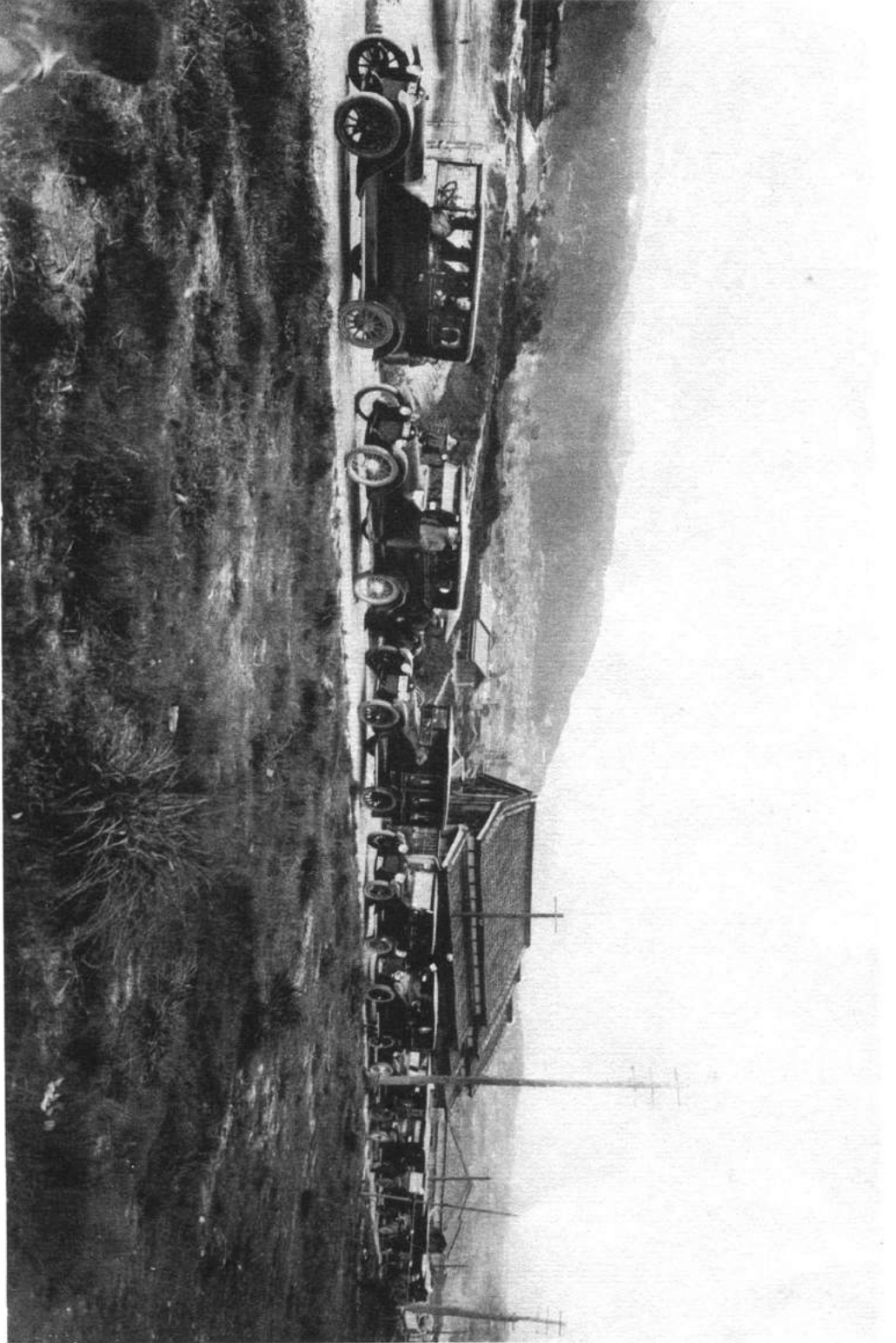
(其三)

靈

柩

會下山火葬場に向ふ









本

葬

當

日

(其二)

喪主位牌を護持し式場善福寺に入る







本

葬

當

目

(其二)

善福寺式場の内部



